

B-14 寝衣材料の吸水性に関する考察

立正女子大家政 續續千代 ○松田歌子 佐藤由紀子 田中美智

目的 中学校家庭科2年の教材の中に、休養着としてパジャマがとりあげられ、材料は木綿が適当とだけあるが、化学繊維の発達や加工技術の進歩にともない、寝衣の材料や組織・加工法も複雑になってきている。寝衣を縫製する前の一段階として布の購入という事がある。その時にどれを求めべきか、寝衣の必要条件の一つである吸水性をとりあげ考えをみることにした。故に今回は汗の吸収に重点をおき、各種材料や組織、加工法の異なる布の吸水状態の変化をみる事により、それらの適合性を消費者の立場から実態調査して検討した。

方法 ○市販既製寝衣より材料・組織・加工法の異なる15種類を選び、 $20^{\circ} \pm 1^{\circ} \text{C}$ 、 $65 \pm 1\%$ の恒温恒湿室内で、平面に並べた脱脂綿100gを1000ccの人工汗に浸して人工皮膚を作り、その上に5cm平方に裁断した試料(購入そのまま、3回洗濯、6回洗濯)を並べ、接着吸水法により2~5~10~30~60分の間隔にて測定した。
○健康なる20代の青年男子4名の人体に5cm平方3回洗濯の試料をのせ、試料と同じ大きさに切ったビニールをかぶせ、5cm平方面から出た汗だけを吸収させ、しかも汗の蒸発流出をさけるために上からガムテープを貼り、30分後の汗の量を測定した。

結果 木綿材料の寝衣は、全般的に従来いわれている通り吸水率はよいが、組織加工法によりかなりの差がみられ、吸水率の非常に低いものもあった。洗濯による吸水速度・吸水率の増加は、組織により顕著な差がみられた。また人体に貼った試料除去後の残留水分は発汗の多少にかかわらず、ほぼ等しい数値となっていた。